

「初めての仕事」の省略前のシーン

初めての仕事

その話は、アロマ商品を販売するページのリニューアル作業だった。個人が運営している小さなホームページで、サティアンが引き受けるには規模が小さい。断ろうかと思っていたところに、ちょうどクミが現れたのだ。

「腕を磨くための練習にはちょうどいいと思うよ。あんまり儲からないけどね」

今あるページの作り直しということでクライアントからの報酬は15万円。クミは10万円がもらえる。5万円はアレンジ料としてサティアンが受け取る。受け取った10万円を誰にどう配分するかは自由にしている。

願ってもない仕事のチャンスだ。もちろんクミに断る理由などどこにもない。ただし、チャッピーがOKしてくれればの話だが。

クミはチャッピーに電話をかけた。ビジネスの成功の秘訣はほかの人の成功に貢献することだ、というヒロの話を思い出した。

「ねえ、チャッピーの文章、すごい評判いいよ。サティアンさんはこれ書いた人はすごい才能あるって」

「本当!? 嬉しいね」

電話の向こうでチャッピーも喜ぶ。

「早速、仕事をひとつやってみないかってお誘いをくれたの」

「へえ。すごいじゃない」

「チャッピーって小説家になりたいんでしょう? もしかしたらチャッピーの文章が誰か出版社の人の目に留まるかもしれないかなって思うの。だから、その仕事も一緒にやらない?」

「うん、いいよ。やるやる!」

チャッピーは大乗り気だった。クミもチャッピーの夢が実現する手伝いができるのなら嬉しかった。

一度、サティアンの事務所でチャッピーも交えてクライアントと会うことになった。

そして当日、チャッピーの会社が終わる時間に合わせて夜7時からのミーティングとなった。

クミは緊張してサティアンの事務所に向かった。初めてのお客さんとなる人に会うためにきちっとした服を着た。メイクは控え目に気をつけた。スナックの仕事に慣れてきたために無意識に濃いメイクになってしまうからだ。

15分前に到着し、チャッピーとサティアンの3人で簡単な打ち合わせをする。

サティアンはチャッピーの文才を認めていた。上手に文章が書ける人はたくさんいる。

ただ、人を買いたい気持ちにさせるようなポイントをついた文章となると、これはセンスをもっていないと書くことはできないのだ。

時間より数分遅れてクライアントの男性がきた。クミは驚いた。アロマのページだから女性だとばかり思っていたのだ。しかも、その風貌は丸顔でひげを生やした森のクマさんだ。この人がアロマを売っているだなんて誰も想像できないに違いない。ホームページにも写真を出さないほうがいいかもしれない。

名刺交換をして、サティアンが中心になって話を進めてくれた。見た目とは違って声が小さくて優しくそうな人だ。クミのことを契約しているウェブデザイナー、そしてチャッピーはクミのパートナーだと紹介してくれた。

（そうか、私ってウェブデザイナーなんだ！）

嬉しいけれどどこか照れ臭い。

プロジェクターで現在のウェブサイトを映し出して、みんなでどんなイメージにするかを検討する。まず相手の要望を聞く。すでにホームページがあるので、それをベースにすればいい。変更したいところ、イメージしているデザインなどを共有していった。

サティアンもチャッピーも堂々としている。こうしたビジネスミーティングには慣れていないクミは気後れしそうになっていた。自分はこの場にふさわしくないし経験不足だという自信のなさが頭をもたげてくるのだ。

セルフイメージが大切だよというヒロの教えを思い出す。『私はプロのウェブデザイナーだ』と心の中で唱える。そして、横のチャッピーをモデリングしてみた。彼女はクミにとって憧れを感じるようなビジネスウーマンなのだ。こっそり横目でチャッピーを観察する。背筋を伸ばして、時折賢そうにうなずきながら相手の話を聞いてメモを取っている。クミはそれを真似てみる。すると自分の呼吸は浅くて速くなっていることに気がついた。チャッピーに合わせてゆっくりと呼吸してみる。だんだんと落ち着いてきて、自分もできるのだという自信が感じられるのだった。モデリングのコツと効果がわかった瞬間だった。

「じゃあ、ここからの話しはホームページに載せるストーリーですね」

サティアンがチャッピーにバトンを渡す。

「どうして、アロマを売ることをはじめたんですか？」

「今までで大変だったことを教えてください」

「やっていて一番嬉しいときはどんなときでしたか？」

「このお仕事をしてから人生にどんな変化がありましたか？」

これらの質問はチャッピーが考えたものにサティアンがアドバイスを加えたものだ。

森のクマさんのストーリーは想像できないような感動的な話だった。サラリーマンだったが会社の組織が合わず、ストレスで鬱病のようになってしまった。家に帰っても奥さんと喧嘩が絶えなかったという。CDも聞いた。セラピーも受けた。でも手軽にできて効果があったのがアロマだった。ふと立ち寄ったアロマセラピーの店でマッサージをしてもらって気に入り、家でも使いたいと思うようになった。そして、自分で調べていろいろな会

社の商品を買って揃えるようになり、いつの間にかアロマに関してはプロ顔負けの知識を手に入れていた。

自己主張ができない性格だったのだが、アロマを使うようになってから主張ができるようになった。気分が楽になり、奥さんとの関係も改善した。これがきっかけで次第に匂いだけではなくアロマエッセンスの持っている心に働きかけるエネルギーに魅力を感じるようになった。ぜひ、世の中の男性にも勧めたいという想いがあった。

「アロマってそんな効果があったんですか」

クミも知らなかった。ただ匂いだけのものだと思っていた。

「そうなんです。でも一般にはあんまり知られていませんけどね。まだまだアロマを必要としている人がたくさんいると思うんです」

彼は熱心によいアロマとそうでないアロマの違いなどを教えてくれた。クミはすっかり自分が欲しくなってしまった。これはいい物語ができそうだ。

ミーティングが終わってクライアントを見送った後、チャッピーが「あの人、どこかマーズを否定しているよね」と言った。ちょうどクミもサティアンもそう感じていたところだった。

「わたしたち少しずつそういうマーズとヴィーナスのバランスなんかには気づくようになっていくんだね」とチャッピーも嬉しそうだった。

チャッピーは小説を発行する準備を始めたらしい。オートステップメールという、登録すると第一号から順に送られるシステムを使って、無料で自分の書いた小説を配信する計画なのだ。

「すごい行動力ね」

クミはチャッピーのそういう部分に感心していた。

「別に。したいことをしてもいいって自分に許可をしたら、簡単にできたの。それにまだ完成してないから配信してないし」チャッピーは本気でたいしたことではないと思っているようだ。そこへ「自信のある人は成功体験を褒めるんだよ」とサティアンが鋭いつっこみを入れた。

みんなでチームを組んでやるというのは勇気が出るものだ。みんなと一緒になんだという想いがやる気を高めてくれる。

クミは家に帰って、さっそくホームページのデザインを開始する。無意識に森のクマさんの歌を口ずさんでいた。

3日後、チャッピーから出来上がった文章が送られてきた。

サティアンから賞賛と褒め言葉をもらった。クミも気分がよかった。

お客さんにもその文章を送ると、感動的な物語になっていますねと驚いてくれた。

その週はとにかくアロマのホームページを作るためにほとんどの時間を使った。初めての仕事に張り切っていた。スナックで働いていても、あそこをこうしようとかデザインや

犬飼ターボ 「オレンジレッスン。」未公開シーン

文面を考えて早く家に帰りたかった。

毎日ウキウキとした気分で過ごすことができた。